グループ９

グローカル化によって日本･世界に良い効果をもたらすためには どのような方法が有効か

～GLOCAL　SCHOOL～

多和田萌花　石津謙太　稲田紘子　鈴木希実子　妹尾知哉
指導者：横島義昭校長　門井寿通教諭　松本穂高教諭

ABSTRACT

In rapidly growing globalized world, we think that Japan should be more 'glocalized'. Glocalization is a coinage combined globalization and localization. While globalization continues, localization takes place in various areas at the same time and the two processes interact with each other. To live in the international society with the goals to cultivate local/regional colors and to develop beneficial relationship among regions and　countries, we are going to investigate the way to glocalize Japan and the other regions around the world. We considered every angle of the way we approach this theme. First, we took part in 'City Chat Cafe', which is a communication event with exchange students in English. We understood the significance of communicating in English and realized the importance of knowing and telling about our local charms. Also, we could focus on human resources of the exchange students. Then, when we conducted field work in Malaysia and Singapore. We realized that the differences between a local community and the world can create profit. As a conclusion, we first thought to create bartering mediation business but we found it was not realistic. So we next thought to create a GLOCAL SCHOOL. In this school which takes root in a local community, we will cultivate glocal human resources and aim at sound glocalization of Japan.

１．研究の目的

近年，日本にはさらなるグローバル化の波が押し寄せ，経済・文化・生活など様々な分野に巨大な影響を与えている。グローバル化によって，市場は地球規模となり，世界中の文化を楽しめ，世界中の人々と簡単に繋がれるようになった。その一方で，グローバル化が既存の地域社会の独自性やネットワークを破壊し，日本を均一化させてしまうのではないかという懸念も生まれ，反グローバル化，ローカル化を叫ぶ声はグローバル化の進行と対応して強くなっている。しかし，多くの社会・経済学者が述べるように，株式会社が台頭する現在，グローバル化とは不可逆現象であり，日本はグローバル化しなければもはや生き残れないともいわれる。そこで，我々が選ぶべき道は「グローカル化」である。ここでいう「グローカル化」とは，「グローバル化とローカル化が同時に，しかも相互に刺激し合って起こること」と定義したい。詳しく言えば，グローバル化の影響を受けた地域が，主体的にその影響を受け入れるか否かを決断し，また，グローバル化に反応し，世界の一部分として自分たちのローカルをグローバルな場に持ち出していくということだ。そのようにしてグローバリゼーションとローカリゼーションが相互に作用しながら進んでいくことである。地域社会の独自の色を大切に残しながら国際社会で生き残っていくために，世界との対等で有意義な関係のために，日本・地域をグローカル化する方法を模索する。

２．調査結果

（ｉ）City Chat Café 参加

①　City Chat Café とは

平成 20 年度筑波大学社会貢献事業の一環で，「インターナショナル・カフェ筑波大生とつくば市民の国際交流推進プログラム」として始まった。

活動場所：三井ショッピングパーク LALA GARDEN TSUKUBA(1 階コミュニティールーム)

活動日時：月１回（日曜日）

運営機関：つくば市国際交流協会，筑波研究学園都市交流協議会，筑波大学

②調査概要

私たちの研究を進めていく上で地域の資源(ここでは筑波大学の留学生を指す)を活かし地元の人々と交流を持ち気軽な英会話の場を提供することで地域社会に貢献をしている City Chat Café に興味を持った。ローカルの場で様々な国の人と交流できるグローバルな体験を提供する City Chat Café の取り組みは本研究の本旨に近く参考になる点が見られる。実際に班員が参加し，また企画されている方にお話を伺った。

③　調査を終えて

City Chat Café に参加し筑波大学の留学生と英語で交流することができた。この場には様々な国の留学生が集まっておりそれぞれの国の情勢についての情報を会話から得ることができた。また，留学生にとっても留学生活で日本人とかかわる機会はあまりないようで，この取り組みは彼らにとっても日本人と交流する良い機会であるようだ。今回の交流はグローバル的な側面が強かった。しかし，この場では地域の話題についても取り上げられている様子が見られローカルの事を積極的にアピールする場として最適であると感じた。そのためには，ローカルについて，その魅力を他者に伝えられるように知らなくてはならないという私た

ちの課題も見つかった。今回の調査では地域にある人材を活かす手段の一つを知ることができた。本研究はグローカル化を目指しているわけだが，地域にグローバルとローカルの側面があるイベントがある以上それとの差別化が必要である。また，City Chat Café の担当の方もおっしゃっていたことであるが，「何のために国際交流するのか」「何を目指すのか」を明確にすることが必要であると学んだ。今後 City Chat Café で得た情報を合わせつつ研究の独自性を高めたい。

④他の国際交流団体についての調査結果

・IFP…週 1 回，都内で学生 100 人規模の国際交流会を開催。大学生はもちろん，高校生や中学生も参加できる。未知との出逢いをプロデュースするというテーマで，交流会の売上をもとにフィリピンの大学のための奨学金をつくるために活動している。
・Find JPN…日本人と主に個人でやってくる外国人観光客を結びつけ，観光客に従来とは一味違ったサービスを提供するビジネスを行っている。

（ⅱ）マレーシア・シンガポールフィールドワーク

私たちは 2015 年８月 17～22 日にかけて，SGH 活動の一環として，マレーシア・シンガポールに海外フィールドワークに行った。

〇調査と考察

マレーシア・シンガポールでは，現地住民と会話をしたり，現地学生とディスカッションをしたりする機会が多々あった。そこでは，私たちが彼らに，彼らの国に関する事柄（特徴・魅力など）を聞くとすぐさま答えが返ってきたのに対し，私たち日本人は自分たちの国・地域のことを聞かれてもなかなか答えることができなかった。これは，私たちが自国の事柄に疎いからである。グローバル化が進展している世界で私たちは海外にばかり目を向けがちだが，自分たちの地域のことを知らないために，それを相手に伝えることが出来ていない現状があると気づいた。

国際交流の場において日本が諸外国からよく言われることは，「日本にはたくさんの魅力があるのに対し，日本人はそれをアピールすることが苦手だ」ということだ。これではせっかくの魅力も相手に伝わらないため，その意味をなさないことになる。これは海外フィールドワークで学んだことそのものだ。

そこで，まず自らのローカルな魅力を知り，それを海外と比べることにより差異を見出す。そしてその差異を魅力として海外に発信することで利益に結びつけられれば，それは地域の発展・活性化にもつながるのではないかと考えた。また，そこでは逆に，「海外のローカルな魅力が我々の地域にもたらされる」ということも同時に起こりうる。これは日本・海外の双方にとって「ローカルな資源場所・物・人材）をグローバルな場に発信する」ということである。ローカルな魅力を知ることは「ローカル化」，それを世界に発信することは「グローバル化」。すなわち，これら２つの行動は「グローバル化とローカル化が同時に，しかも相互に刺激し合って起こること」という，「グローカル化」の定義に当てはまる。

以上より，海外フィールドワークは我々の研究目的に対するアプローチの仕方について大きなヒントを与えてくれた。

（ⅲ）物々交換仲介ビジネスについて（案１）

①物々交換のねらい

グローカル化を考えた時に，地域の「モノ」と「人々」を繋ぐ，という古典的な方法に戻った「物々交換」をすることを思いついた。物々交換を行うことには，次の二つのメリットがある。

（１）外国のモノを手に入れることができる。つまり，ほかの文化の良さを享受できる。
（２）外国に自国（地域）の良いモノを発信できる。自らが自国の良さを見直すきっかけになる。

これらを実現するための最も現実的な手段として，ネット上のシステムを使ったオンラインの物々交換を考えていくことにした。

②マレーシアにおけるアンケート調査

オンライン上での物々交換システムを考えていくに先立って，現在多くの人に利用されているサービスであり物のやり取りをするビジネスであるオンラインショッピングについての意識調査を行った。（KLC にて，調査対象３０人）

質問項目①　オンラインショッピングをする際に最も重要視するのは以下の３つのうちどれか。

コスト……１１人
かかる時間…６人
品質……１３人

質問項目②　オンラインショッピングの問題点には何が挙げられると思うか。

・品質が心配なのでそもそも使わない

アンケートの結果，オンラインでの物のやり取りにおいては品質面を重視する人が最も多いと分かった。

③株式会社 Studio3o2 への企業訪問

（１）株式会社 Studio3o2 について

各種ウェブサービス，インターネットサービス及びコンピュータソフトウェア開発などに関連するサービス全般の仕事を行っている企業。物々交換サイト「monoeco（モノエコ）」を運営している。東京都江東区の本社にて，11 月 13 日に代表取締役のミンさんにお話を伺った。

（２）調査結果

ア）　サイトの運営について

・登録制のサイトであるが，個人情報としてはメールアドレスとユーザー名のみで使える。
・5，6 年前に始まり，現在のユーザーは 3000 から 4000 人登録がある。
・月に 30 件ほどの利用がある。（波があり，引っ越しの時期には増える）
・「物々交換」「売ります買います」「無料であげます」「レンタル」の４項目がある。
・完全無料のサービスであり，収益化にはまだ至っておらず，物々交換の場所提供のみしている状況。

・広告収入のみ得ている。

イ）　私たちの質問について

Q,どうして始めたのか。

A,引っ越しをした時にサイト上でものを誰かにあげられたら無駄がなくなると考えた。エコの観点から行っている。

Q,安全面はどう管理しているのか。

A,特に何もしていない。以前，警察の制服が物々交換の商品としてサイト上に出され，警察から取り下げるように電話が来たことがあるが，それ以外は特に何事もなく運営を行えている状況。

Q,広報活動はどのように行っているのか。

A,初期段階でチラシを配ったこともあるが，現在は何も広告を出していない。

ウ）　私たちのビジネスプランについてのアドバイス

・国際的に発展させるという観点からすると，言語が課題となってくると思う。

・保障制度をつくるとよい。例えば yahoo オークションのような出品者　を評価するシステムなどがあったらいい。

・どうやって告知していくかが難しい。

・出品するカテゴリを「工芸品」や「食品」などのように絞って始めた方が，人が集まりやすい。

・リサイクルショップと提携して，その商品をネット上に出品することで，出品料を取るようにすれば収益化が図れる。

・アプリなどで気楽に使えるようにすると良い。

エ）　物々交換についてのまとめ

企業訪問を通して，「物々交換」は品質・安全面，収益面，需要などの点から，ビジネスという形で運営していくことにはあまり向いていないことが分かった。また，やりとりされる物が地域のものに絞られず，私達のねらいとはずれた物々交換がなされてしまう可能性も否定できないとの考えに至った。

（ⅳ）　グローカル塾について（案２）

これまでの研究内容を踏まえて，日本にとっても世界にとっても有益なグローカル化をめざすためには，グローバル化が進む現代において，グローバル・ローカルの両方の良さを享受する人材を育成することが一番の近道ではないかという考えに至った。そこで，私達が考えたのは「小学生に対するグローカル教育ビジネス」である。このため，地域ごとにグローカル塾を設置する。これが私たちの最終的なアイデアである。

①　グローカル塾のねらい

（１）グローバルな場で求められる知識，能力を養う

（２）ローカルの魅力を学び，地域人としてのアイデンティティを確立する

（３）自分の意見を強固に持ち，それを伝える発信力を磨く

以上の３つの柱で，国際社会で活躍できるグローカル人材を育成する。

②　具体的内容（参考：図１）

（１）活動内容案

ア）グローバルな力を伸ばす

国際社会で活躍する人を招いてキャリア教育，小学生にもわかる国際問題講座

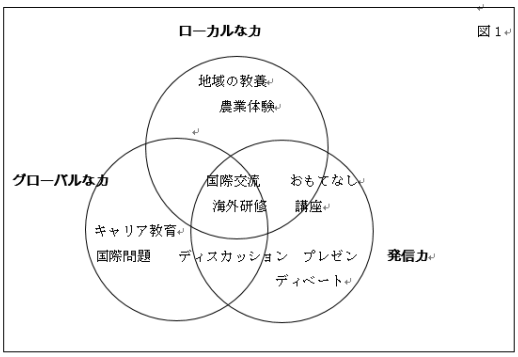
イ）ローカルな力を伸ばす

農業体験，地元の祭りへの参加，地域の歴史を学ぶ

ウ）発信力を伸ばす

ディベート，プレゼンテーション講座，ディスカッション

その他ア）～ウ）を融合した，国際交流，海外研修，おもてなし講座なども行う。



（２）なぜ小学生なのか

私たち高校生が SGH の活動を行った時に一番問題だったのは「時間」である。勉強・部活に追われる中活動を進めていくことは難しかった。そこで，小学生のうちから活動を始めればその問題点が改善されると考えた。また，小学生は，好奇心旺盛で多感な時期である。ゆえにそのような時期にグローバル。ローカル両方の側面の考え方を身につけることは「グローカル人材」の育成に大いに貢献できるはずだ。また，進路が定まっていない時期に様々な視野でものごとを見ることは彼らの進路選択に役立つと期待できる。

（３）講師について

基本は，地域の大学と提携して留学生を雇い，彼らにも地域の日本人とかかわる機会を提供する。

また，適宜さまざまなバックグラウンドから講師を雇い，幅広い教育を行う。

３．結論・今後の課題

ⅰ），ⅱ）の体験からでグローカル化の推進のための心構えや方法について考察し，ⅲ）（案１）の「物々交換仲介ビジネス」を計画したが，現実が難しく，期待通りの効果が得られないと考えられたため，ⅳ）（案２）の「グローカル塾」を設立し，グローカル人材を育成することによって間接的にグローカル化に貢献するということを，私たちのテーマについての最終的な提案としたい。

グローカル塾の設立によって，日本・世界にそれぞれ良い効果をもたらすことのできるグローカル人材を育成し，日本の健全なグローカル化を目指す。グローカル塾の内容は，まだ検討の余地があると考えており，それを今後の課題としたい。

４．文献・謝辞

・文献：『なぜ，日本企業は「グローバル化」でつまづくのか』（日本経済新聞出版社）

・『外国語教育ⅤⅡ－グローカル時代の外国語教育－』（朝日出版）

・『グローカル教育の実践的展開：社会・文化のグローカル化に対応した研究・教育環境の整備』（成城大学民俗学研究所グローカル研究センター）
・『アメリカ多文化教育ー共生を育む学校と地域ー』（明石書店）
・株式会社 Studio3o2 様，City Chat Café 様，ありがとうございました。